

Title	乳魔を内容とした後腹膜の海綿状リンパ管腫の1例
Author(s)	佐野, 克行; 川崎, 千尋; 佐藤, 和彦; 岩崎, 皓; 石塚, 栄一
Citation	泌尿器科紀要 (1990), 36(12): 1435-1438
Issue Date	1990-12
URL	http://hdl.handle.net/2433/117070
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

乳糜を内容とした後腹膜の海綿状リンパ管腫の1例

横浜赤十字病院泌尿器科（部長：石塚栄一）

佐野 克行，川崎 千尋，佐藤 和彦

岩崎 皓，石塚 栄一

A CASE OF RETROPERITONEAL CAVERNOUS LYMPHANGIOMA WITH THE CONTENT OF CHYLOUS FLUID

Katsuyuki Sano, Chihiro Kawasaki, Kazuhiko Sato,
Akira Iwasaki and Ei-ichi Ishizuka

From the Department of Urology, Yokohama Red Cross Hospital

We report a case of retroperitoneal lymphangioma in a 26-year-old man whose chief complaint was lumbar discomfort. Ultrasonography revealed pararenal cyst on his left side. At the operation, we discovered a cystic tumor between peritoneum and Gerota's fascia. Pathological study indicated cavernous lymphangioma containing chylous fluid. There has been no recurrence for a year after the operation.

(Acta Urol. Jpn. 36: 1435-1438, 1990)

Key words: Lymphangioma, Chylous fluid

緒 言

嚢胞性リンパ管腫は小児には比較的良好に見られる疾患である。その好発部位は、頸部・腋窩が多く後腹膜に発生したものの報告は本邦ではまだ100例に満たない。それらの多くに見られる内容は血液や凝血塊であり、乳糜を内容とした報告例はきわめて少ない。今回、われわれは成人の後腹膜に発生した乳糜を内容とする嚢胞性リンパ管腫の1例を経験したので報告する。

症 例

患者：26歳，男性

主訴：腰背部腫脹感

既往歴・家族歴：特記すべきことなし

現病歴：1988年6月より上記主訴あり9月に近医受診。エコーにて後腹膜に嚢胞性病変を認めたが、確定診断がつかず精査のため当科に紹介された。11月初診。

入院時現症，検査：末梢血液，血液生化学，尿一般検査にて特に異常を認めない。

放射線検査：IP（1988年11月），腎臓 tomographyを含めて両側腎盂腎杯像に異常なし。左上部尿管に不整な粘膜を思わせる所見が見られた（Fig. 1）。CTで（同年12月）は左腎下極に径約3cmの嚢胞性病変が

見られた（Fig. 2）。

手術経過：上記より後腹膜嚢胞と診断した。悪性腫瘍の存在も考えられるため，1989年1月，手術を行った。左第12肋骨下にて後腹膜腔に入り，Gerota 筋膜を開いたが，異常は見られなかった。ところが，Gerota 筋膜より腹側で，壁側腹膜との間隙に黄白色鶏卵大の腫瘍が発見された。この位置関係を Fig. 3 に示す。腹膜からの剥離は容易であり，脈管性の連絡もなかったため，腸間膜リンパ系との関係はないと判断した。腫瘍はなめらかで浸潤と見られるような所見はなかった。触診上は軟らかく，可動性もあった。周囲からは無理なく剥離されたので，完全な形で切除できた（Fig. 4）。

病理所見：切除した腫瘍は5×4×3cm，25g，内容は14ccの黄白色乳状の液体だった。この液は脂肪の小滴を含むほか多数の赤血球が鏡検で見られた。蛋白濃度は約100mg/dlで他の生化学検査は行わなかった。組織学的には海綿状に拡張したリンパ管からなる良性腫瘍で内腔は一層の扁平な内皮に覆われ，間質は脂肪組織や平滑筋成分を含む結合組織からなっていた（Fig. 5）。リンパ管腔構造の形成や，血管外膜系細胞の増殖巣かと思われる所見が一部に見られた。

術後経過：経過良好で，2月11日に退院した。1989



Fig. 1. Intravenous pyelography. The left upper ureter showed irregular appearance. (arrow)



Fig. 2. CT scanning. Cystic mass was detected in front of the lower portion of left kidney.

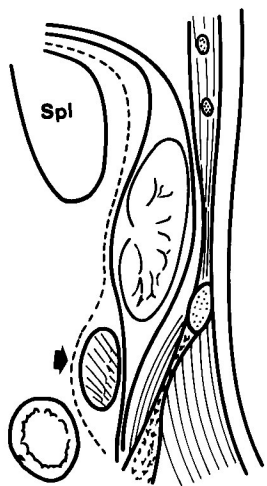


Fig. 3. Location of the tumor. The tumor (arrow) was discovered between peritoneum (dotted line) and Gerota's fascia (solid line). Spl=spleen

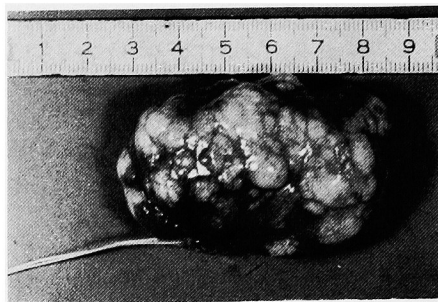
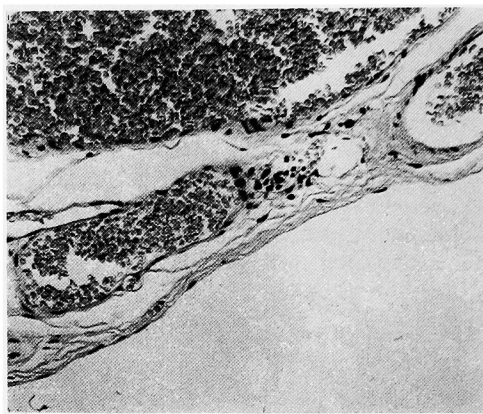


Fig. 4. Resected tumor. Polycystic masses contained yellowish-white fluid.



a



b

Fig. 5. Microscopic views. Histology showed cystic spaces with lining of single cell layer and connective tissue with lymphocyte infiltration (a; HE×100). There is also adipose tissue and muscle-like structure (b; HE×100).

年11月の CT では、右腎周辺に異常は見られなかった。

考 察

後腹膜リンパ管腫は本邦では99例が集計されてい

る¹⁾。

病因論的には hematoma の一種として小児の hy-groma などと同様のものと考えられる説があり²⁾、胎生期のリンパ管発生の際 budding の異常によって生じたとされている³⁾。これによれば、内頸静脈外側、腸間膜根部、腎部などが好発部位と言われている⁴⁾。一方、後天的に手術、炎症、外傷などによってリンパ管の閉塞が起こって発生するという機転も考えられている⁵⁾。自験例はどちらに属するか不明であるが、患者はスキーを趣味としておりこれにより外傷性の機転が働いたことは考えられる。

臨床的には、1) 単純性、2) 海綿状、3) 嚢状に分類されているが⁵⁾、1)はきわめて少なく、2)が約10%、3)が約90%を占めている⁶⁾。診断基準として Rosanger ら⁷⁾が述べているのは、a) 内腔は円柱上皮や立方上皮でない内皮細胞に覆われ、b) 嚢胞壁内に小リンパ腔があり、c) 壁内にリンパ節様構造を持ち、d) 血管、平滑筋、結合織を共に含んでいるという諸点であった。嚢状のものでは foam cell の存在⁸⁾があげられているが、海綿状リンパ管腫では特別の基準はないようである。自験例は3)の海綿状に属すると考えられ、a)~d)の基準を満たしていた。

組織学的にはリンパ管腫は良性腫瘍であるが、海綿状リンパ管腫の浸潤性増殖⁹⁾や悪性化の報告¹⁰⁾もある。他に鑑別しなければならない悪性新生物として、liposarcoma, leiomyosarcoma, fibro-sarcoma, malignant teratoma¹¹⁾がある。これらは多く solid な形をとるが、ときに cystic な像を示すので注意が必要である。実際上は悪性を否定するために手術が必要なが多い。

内容液については本邦 83 例中血性24例、漿液性 23 例、乳糜 9 例との報告¹²⁾がある。自験例では、十分な分析をしなかったが、肉眼的には明らかに乳糜性であった。蛋白濃度は、リンパ性のものでは 2~3 g/dl あるはずだが、本例ではその1/10程度しかなく、この原因は不明である。

後腹膜の腫瘍は症状に現われることが少なく、腹部の膨隆や腫瘍として触知されたり消化器の圧迫症状などが、主訴の大部分である⁶⁾。破裂などを起こさない限り疼痛も軽度で、早期発見はかなり困難といえよう。最近では、自験例のように軽微な症状の訴えに対しても超音波や CT を行なう傾向があり、発見の可能性は増加していると言えよう。特に超音波は侵襲もなく容易に行えて、きわめて有用である。しかし相馬らの集計した83例¹²⁾のうち術前に診断がつけられていたのは5例しかなく、多くは後腹膜腫瘍という漠然と

した名のもとに手術に至っている。超音波はもとより CT でも内容によって CT 値が大きく変動するため¹³⁾確診は困難なことがある。今のところ、後腹膜の嚢胞性病変の鑑別診断の1つとして本症を考慮することが臨床重要である。

治療は多くの症例に全摘術が行われているが、周囲組織と強く癒着しているものでは部分切除術に止まることもある。リンパ管の結紮が十分なら、これでも特に問題はないようである。リンパ本幹を結紮してしまった場合、末梢に浮腫がみないのは不思議であるが、そのような報告は見られていない。これはリンパ管の側副血行がきわめてよく発達しているためと考えられる。

結 語

後腹膜リンパ管腫の1例を報告し、若干の考察を加えた。

本症例は、1989年9月21日の第465回日本泌尿器科学会東京地方会にて発表した。

本症例を御紹介下さった清川医院の清川 晃博士に感謝いたします。

文 献

- 1) 金井塚敏弘, 伊谷賢次, 繁田浩史, 山村義元, 粉川隆文, 吉川敏一, 杉野 成, 金網隆弘, 近藤元治, 高階謙一郎, 前田武昌, 芦原 司: 後腹膜巨大リンパ管腫に血管腫を合併した1症例. 日内会誌 76: 1595-1603, 1987
- 2) Robbins SL and Cotran RS: Pathologic Basis of Disease. 2nd ed., pp. 636, W.B. Saunders, Philadelphia, 1982
- 3) Koshy A, Tandon RK, Kapur BM, Rao KU and Joshi K: Retroperitoneal lymphangioma. Am J Gastroenterol 69: 485-490, 1978
- 4) Kalish M, Dorr R and Hoskins P: Retroperitoneal cystic lymphangioma Urology 6: 503-508, 1975
- 5) 岩元則幸, 川瀬義夫, 橋本哲也, 山崎 悟, 福田豊史, 近藤守寛, 山本則之, 小野利彦, 平竹康祐: 後腹膜原発のリンパ管腫の2例. 西日泌尿 51: 561-565, 1989
- 6) 森本泰介, 栗津篤司, 田代久夫, 樽見隆雄, 大和俊夫, 中川正久, 井田 健, 中瀬 明, 曾田一也: 後腹膜原発嚢状リンパ管腫の1例と本邦報告例の検討. 日臨外会誌 44: 912-918, 1983
- 7) Rosanger K: A case of angiomata of the retroperitoneum and mediastinum. Acta Clin Scand 139: 494-498, 1973
- 8) Harrow BR: Retroperitoneal lymphatic cyst. J Urol 77: 82-86, 1957

- 9) 黒川善栄, 神谷順一, 桐岡智二, 前田正信, 中村達雄, 秋山三郎: 膵頭十二指腸切除術にて切除した後腹膜リンパ管腫の1例. 日外会誌 **88**: 222-226, 1987
- 10) Henzel JH, Pories WJ, Burget DE and Smith L: Intra-abdominal lymphangioma. Arch Surg **93**: 304-308, 1966
- 11) Munechika H, Honda M, Kushihashi T, Kozumi K and Gokan T: Computed tomography of retroperitoneal cystic lymphangiomas. J Comput Assist Tomogr **11**: 116-119, 1987
- 12) 相馬光弘, 北川 隆, 岡野重幸, 武藤英二, 武田章三, 神田 誠, 岡村毅与志, 並木正義: 後腹膜リンパ管腫の2例. 臨放 **33**: 1147-1150, 1988

(Received on January 31, 1990)

(Accepted on June 12, 1990)